

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720093

研究課題名(和文) しのびね型 とその周辺の物語に関する物語史的研究

研究課題名(英文) Study on the Shinobine type tales and the related tales

## 研究代表者

金光 桂子 (KANAMITSU, Keiko)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30326243

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世王朝物語と室町物語との間の連続性と変容の様相を明らかにすることを目指し、いずれも しのびね型 という話型に属する室町物語『しぐれ』『雨やどり』を対象に、諸本調査と本文比較に基づいて検討を進めた。特に、近年紹介された室町物語『しぐれ』の古絵巻の本文を精査し、従来知られていた諸本より格段に古態を留める本文であることを明らかにした。また、中世王朝物語『あきぎり』との関係について新たな考えを提示した。

研究成果の概要(英文)：This research project has focused on the Shinobine type tales written in medieval times, for the purpose of explaining the similarities and the differences between the court tales in Kamakura period and the Otogi-zoshi in Muromachi period. The investigation of the various manuscripts of the Shigure Story leads to the conclusion that the text of the scroll copied in 1513 has more similar character to the court tales than any other text.

研究分野：日本文学

キーワード：中世王朝物語 室町物語 しのびね型

### 1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』に代表される王朝物語の流れは、鎌倉時代以降も、中世王朝物語、室町物語(御伽草子)の公家物へと続いてゆく。これまで中世王朝物語を主たる研究対象としつつ、室町物語の諸本調査にも携わる中で、平安朝の物語から中世王朝物語への展開については研究が進みつつある一方、中世王朝物語と室町物語との関係については、資料的な制約もあって、実証的に論じることが難しいことを感じてきた。

近年、室町物語『しぐれ』の古絵巻が徳田和夫氏によって紹介された(『魅力の奈良絵本・絵巻』2006年)、『しぐれ』は、平安末期から室町期にかけて流行したしのびね型という話型の物語で、中世王朝物語『しのびね』や『あきぎり』との関係が従来から指摘されていた。この新出絵巻は永正十年(1513)という現存最古の写本であるばかりでなく、本文は他の諸本と大きく異なり、より古態を保っている可能性が示された。

同じく近年、室町物語『雨やどり』の古写本が石澤一志氏によって紹介された(『国文学研究資料館調査研究報告』29、2009年3月)、『雨やどり』もしのびね型の要素を一部含み、『しぐれ』との類似も見られる物語である。南北朝期と推定される新出古写本は、この作品が中世王朝物語に限りなく近い時期の成立であることを示唆した。

このように、しのびね型及びその周辺の物語に関して、中世王朝物語と室町物語との間の懸隔を埋めるような資料が次々と出現してきた。

### 2. 研究の目的

平安時代以降の物語の歴史を見渡した時、中世王朝物語と室町物語との間の断絶は一見大きいように思われる。室町物語は中世王朝物語から何を受け継ぎ、どのように変容させていったのかを検証することが、両者の本質的な違いを明らかにし、全体的な物語史を記述するためには必要である。

本研究はこのような問題意識に立ち、しのびね型の物語を対象として、中世王朝物語から室町物語への連続性を見出すとともに、相違点をも浮き彫りにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

『しぐれ』と『雨やどり』という二作品を中心に研究を進める。いずれも室町物語に分類される作品であるが、中世王朝物語との密接な関わりを示唆する伝本があり、その性格を追究することが、叙上の目的を達成するために有効であると期待される。具体的な方法は以下のとおり。

#### (1) 『しぐれ』

永正十年絵巻の本文を精査し、他の諸本と比較して古態性を検証する。

諸本をできるだけ実見調査した上で、従来の諸本論を見直す。

永正十年絵巻の本文に基づいて、『しぐれ』と中世王朝物語『あきぎり』との関係を考える。

#### (2) 『雨やどり』

諸本をできるだけ実見調査した上で、新出古写本の本文が他の諸本より古態といえるのかどうか検討する。

古態本文に基づいて、『源氏物語』をはじめとする王朝物語からの影響、他の室町物語との近縁性という両面から、作品の位置づけを試みる。

### 4. 研究成果

『しぐれ』『雨やどり』ともに諸本の調査を行い、本文を整理するとともに、作品の分析を行った。『雨やどり』についてはまとまった成果が上がっていないため、『しぐれ』に関する成果を報告する。

#### (1) 『しぐれ』永正十年絵巻の本文

『しぐれ』永正十年絵巻は、書写年代が最も古いというばかりでなく、本文の上でも古態を残しており、より王朝物語に近い性格を持っていることを、以下の観点から明らかにした。

#### 文体・用語

永正十年絵巻と他の諸本とでは、物語内容はほぼ一致するが、同じ場面を描写していても文体がまったく異なる。

たとえば、主人公の中将が清水寺で出逢った姫君を自邸に伴う場面を、他の諸本では中世の語り物によく見られる道行文のような七五調の文体で描くが、永正十年絵巻では、『源氏物語』の類似の場面を踏まえたと思しき、より流麗な和文で綴られている。

それ以外にも、他の諸本と比較して永正十年絵巻の文章には、漢語があまり見られない、引歌表現を多用する、会話文において「候」でなく「侍」という丁寧語を用いるなどの特色があり、いずれもより古風な文体であることを示している。

#### 人物造型

永正十年絵巻に比して他の諸本では、男女主人公を取り巻く脇役たちを、善悪ないし敵味方のいずれかに二分する傾向がある。

例として中将の母北の方を取り上げる。他の諸本における母北の方は、夫と一緒にあって息子に気の進まない結婚を強要し、主人公の姫君を追い出す際にも一役買うなど、父左大臣とほとんど変わらない敵役である。

永正十年絵巻でも母が中将に縁談を進める場面はあるが、それはあくまでも息子のた

めを思って父に逆らわぬよう助言するのであり、姫君に対する中将の思いにも一定の理解と同情を示している。こうした母親の人物像は、同様の筋立てを持つ王朝物語『しのびね』にも通じるものであり、他の諸本の単純で典型的な人物造型がいかにも室町物語的であるのに対して、より王朝物語に近い性格の現れといえる。

#### 心理描写

永正十年絵巻の本文は、登場人物の心理描写の点でも他の諸本に比べ際立った特徴を持つ。

たとえば他の諸本では、主人公の女君が中将と別れた後、帝に思いを寄せられるようになった際、初めはひたすら泣くばかりであったのに、周囲の者に説得されると急に態度を変え、帝を受け入れるようになる。そこにどのような心境の変化があったのかはほとんど読み取れない。

一方永正十年絵巻では、中将との関係に傷ついた経験から帝の愛情も容易に信じることのできなかった女君が、帝の誠意ある言動に接して徐々に心を開いてゆくという心の機微が、こまやかに書き込まれている。人物の心情より話の筋を進めることを優先する他の諸本に対して、登場人物の心情を丹念にたどる永正十年絵巻は、やはりより王朝物語的というべきであろう。

#### 宗教性

悲恋遁世譚である『しぐれ』は必然的に宗教色を帯びることになるが、相対的に見て永正十年絵巻は宗教性がやや稀薄である。

他の諸本が物語の末尾を「すべては観音の利生であった」と締め括るのに対し、永正十年絵巻にはその一文がない。それ以外にも、他の諸本では、中将がかなり早い段階で出家願望を語り、清水寺参籠中はより敬虔な態度を取り、女君との再会が絶望的になったことを知ると迷うことなく出家を敢行するなど、中将の出家遁世をより理想的に描き、観音の利生として強調しようとしている。

本来この物語における観音の靈験は、永正十年絵巻のように、男女主人公の出逢いと女君の栄華のみに働いていたものを、中将の出家まで含めた全体を、室町物語にありがちな利生譚として仕立て上げるべく、様々な操作を施したのが他の諸本であると推定される。このことも、永正十年絵巻がより古態を保っていることの裏付けとなる。

#### (2)『しぐれ』諸本の関係

従来『しぐれ』の諸本は、A・B・Cの三類に分類され(「室町時代物語類現存本簡明目録」)、中でもA類に属する大東急文庫本が最も原初的な本文であると考えられてきた。しかし、より古態を残すと思われる永正十年絵巻の出現によって、諸本の関係も再考を迫られることになった。

B類・C類には、A類には存在しない、主人公の女君と中将の妹姫とが親しく交わる場面があり、後に付け加えられたものとされてきた。しかし永正十年絵巻にも、妹姫との交流はむしろより親密に、また物語の展開上より重要な意味をもって描かれている。この現象を説明するには、従来とは逆に、永正十年絵巻 B類・C類 A類という順序を想定し、妹姫に関する叙述が徐々に削られていったと考えるべきであろう。

また、いくつかの和歌の語句について、永正十年絵巻・B類・C類とA類との間で本文の対立している事例がある。たとえば「思ふことかなひてともに行く道になに朝霧の袖濡らすらむ」(永正十年絵巻)という歌の「朝霧」は、A類のみ「夕霧」である。ただし、この歌が詠まれた時間帯にも異同があり、永正十年絵巻ではまさしく朝の場面であったのだが、他の諸本では少し前にずらしているのである。そのため、B類・C類では歌句との間に不整合が生じている。A類の本文は一見合理的に見えるが、永正十年絵巻のような本文から改変されてゆく中で生じた矛盾を解消した、むしろ後出の本文であると考えられる。

永正十七年という書写年次を持つA類大東急文庫本が重要な伝本であることは否定されないけれども、今後その価値は、より原初的な本文を伝えるという点にではなく、永正十年絵巻とさほど隔たらない年に書写されたこの本が、これほど変容を遂げた本文を持っているということに求められるべきであろう。

#### (3)『あきぎり』との関係

夙に辛島正雄氏によって、中世王朝物語『あきぎり』に「さねあきらの中将」という『しぐれ』の主人公の名が引用されていること、呪詛という趣向や和歌においても両作品の間に類似が見られることが指摘されていた(『中世王朝物語史論』2001年)。中世王朝物語が室町物語を引用するという、常識とは逆方向の影響関係は、物語史研究に大きな課題を投げかけた。

今回、永正十年絵巻の本文に基づき改めて『しぐれ』と『あきぎり』の関係を調査したところ、ある程度まとまった量の文章、場面描写において、両者の類似する箇所がいくつか見出された。また、『あきぎり』のうち文意不明であった「つらからば、さてはあらで」という本文が、『しぐれ』の和歌を引用している可能性も浮上した。

さらに、従来『しぐれ』諸本より古いと目される永正十年絵巻の出現は、『あきぎり』との一見不可解な前後関係を説明するための手がかりをも与えてくれる。『しぐれ』は、散逸した鎌倉以前の物語『恋に身かふる』を改作したものであるというのがほぼ通説だが、その改作は一回的なものではなかっただろう。何段階かの改作ないし異本の作成が行われ、そ

のうち比較的古い段階の本文が永正十年絵巻に伝わっているのだとすれば、さらにもっと遡る『しぐれ』本文が存在し、その本文を『あきぎり』作者が目にしていただけと想定することも、あながち無理ではない。

『しぐれ』という一つの作品の時代による変容と『あきぎり』との関係は、より綿密に検証する必要があり、それを通じて中世王朝物語と室町物語との間の連続性をさらに追究することを、今後の課題とする。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

金光桂子、中世王朝物語『あきぎり』引歌小考 室町物語『しぐれ』との関係におよぶ、国語国文、査読有、第83巻第7号、2014年、22-36頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

金光 桂子 (KANAMITSU, Keiko)  
京都大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：30326243

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし